

# この子らと

令和7年度2月号

## 命輝く子ども

わくわく鹿児島中央認定こども園



園長 川口公男

### 光の春



2月23日は、「春分の日」、冬の寒さに別れを告げ、春到来を感じる季節となります。別れと出会うのときが刻一刻と近づいてくる季節でもあります。

2月4日は「立春」、春の出発の日です。春へと一歩、一歩と歩みを進める時期。しかし、3日寒い日が続くと、4日温かい日が続くという三寒四温を繰り返しながらの歩みであり、2月は、寒さに震える日々がまだまだ続きます。

厳寒の中にも注がれる太陽の光に春を感じることから2月を、「光の春」と呼んでいます。

“春は 名のみの 風の寒さや”



「光の春」の語源は、ロシアです。ロシアは、北極に近い地方で冬は暗く、陰うつで長く続きます。春とは言え、一日の最高が-5℃前後、最低気-11℃と低いためにロシアの人々は、太陽光の明るさで春を感じると伝えられています。

甕島に勤務していた頃がありました。役場の一室で業務をしているとあちこちで、うぐいすのさえずりがあちこちで響きわたり、春の到来「音の春」を感じていました。



春の訪れは、光の春→音の春→気温の春の順でやってくるといわれています。

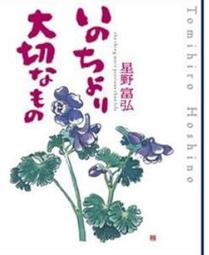
2月3日は「豆まき会」



本園では、鬼の仮装や登場の仕方等で子どもたちに恐怖感を与えないように配慮しています。

鬼の的あてげゲームをしたり、逃げ惑う職員が扮する鬼に豆を投げたりして楽しめます。

星野富弘先生は、若き日とび箱の試技で頸椎を捻挫されて手足の自由をうしなしました。絶望の中でお母さんがくわえさせたサインペンで詩を書き、その詩に水彩画を添えられました。(詩画集)



「苺という文字の中に、母という文字を入れた遠い昔の人よ、

あなたにも、優しいお母さんがいたのですね。

時代は、変わりましたが、今の子どもたちも皆苺が大好きです。お母さんが大好きです。

喜びが集まったよりも 悲しみが集まった方が 幸せに近い気がする

強いものが集まったよりも 弱いものが集まった方が 真実に近い気がする

幸せが集まったよりも 不幸せが集まった方が 愛に近い気がする

### 本園の子どもたちは、戸外遊びが大好きです

園庭遊びに向かう子どもたちは、年齢にかかわらず実にうれしそうに飛び跳ねています。

人類のたどった道は、数十万年前の原始時代から石器時代～弥生時代～・・・と連綿と引き疲れて今を生きています。

「1歳の子どもが草深い田舎に行き、小川で遊び、野山を駆け回り、くたくたになって帰ってきました。そして大事そうに握りしめていたものは「いしころ」でした。」



ある心理学者は、「10歳までに原始時代から現代までの体験を追体験していないと子どもたちは健やかな成長をしない。」と言っています。

本園では、砂遊び、どろんこ遊びをしたり、野山を駆け回ったり、水たまりをのぞいたりなど戸外遊びを積極的に取り入れています。